

## 大宮図書館移転開館7周年記念展示

妹・佐代子  
姉・民子

—妹から見た歌人・大西民子の素顔—

No.	種別	内容
1	自筆原稿	「最後の日」大西民子 筆 「俳句」1972年8月号掲載
2	書籍	『A TALE OF TWO CITIES』 チャールズ・ディケンズ 著 1942年刊行・初版 研究社出版株式会社
3	自筆原稿	「わが家のシレーヌ」菅野佐代子 筆 「短歌」1972年4月号掲載
4	書籍	「短歌」4月号 昭和47年4月1日発行 角川書店
5	自筆原稿	「三人姉妹」大西民子 筆 「短歌研究」1993年10月号掲載
6	日記	奈良女子高等師範学校受験のころの民子の日記 1940(昭和15)年～1941(昭和16)年ごろ
7	自筆原稿	「年々に聴き慣れし竹の落ち葉なれ雨かと醒めし妹が問ふ」大西民子 筆
8	自筆原稿	「住宅考」大西民子 筆 「埼玉新聞」1969年12月15日掲載
9	自筆原稿	「道に会ひ連れだちて帰る妹のいづく荷のなかセロリが匂ふ」大西民子 筆
10	自筆原稿	「人のためなし得ることの小さくて短き釘をわれは戸に打つ」大西民子 筆
11	書籍	『野分の章』大西民子 著 1978年刊行・初版 牧羊社 掲載歌 「黒真珠の粒余すなくつなぎ終へ少し短くなりし首飾り」
12	自筆短冊	「遠き雲の地図を探さむこの町をのがれむといふ妹のため」大西民子 筆
13	自筆原稿	「曇りのまま日は暮れむとしジャスミンの香のたつ紅茶いれてもひとり」大西民子 筆

展示している資料および写真は全て大宮図書館の所蔵品です。

## 主な参考文献

『回想の大西民子』北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年  
『自解100歌選 大西民子集』大西民子/著 牧羊社 1986年  
『青みさす雪のあけぼの 大西民子の歌と人生』原山喜亥/編 さきたま出版会 1995年  
『評伝大西民子』有本俱子/著 短歌新聞社 2000年  
『まぼろしは見えなかった 大西民子随筆集』大西民子/著 さいたま市教育委員会 2007年  
『クラウン仏和辞典 第7版』天羽均/ほか著 三省堂 2015年  
「短歌研究」46巻10号 短歌研究社/発行 1989年

▲写真「菅野佐代子」  
撮影年度不明

## 民子の妹・佐代子

おおにしたみこ かのさよこ  
大西民子の妹・菅野佐代子は1931(昭和6)年に岩手県盛岡市の菅野家に生まれ、姉の民子とは仲の良い姉妹でした。

佐代子はもの静かな性格でしたが、日々の暮らしの中で、時には姉の性格や短歌に鋭い言葉を投げかけることもありました。

佐代子は、警察官である父・佐介さすけの転勤にともない、母・カネとともに住所を変え、1940(昭和15)年ごろに岩手県高田町いわてけんたかたちょう(現・岩手県陸前高田市りくぜんたかたし)に移住します。一方、民子は通っていた盛岡高等女学校もりおかこうとうじょがっこう(現・盛岡第二高等学校)を転校したくないと、ひとり盛岡に残り下宿し、その後は進学先の奈良女子高等師範学校ならじょしこうとうしはんがっこう(現・奈良女子大学)の学校寮に入りました。

## 民子の日記より

官舎へ廻って恐るゝ門の格子を明けて玄関を覗いた。

ある！見なれた真赤な妹のサンダル。

私は 生き返ったやうに「只今」と叫んだ。

父が 晴れやかな顔をする。

「高田はい所だぞ。」と嬉しさうだ。

民子は、盛岡時代から日記をつけていました。この部分は1940(昭和15)年12月29日、父母と妹が引っ越した高田町をおそるおそる訪れた際の記述などから、一部を抜粋しています。

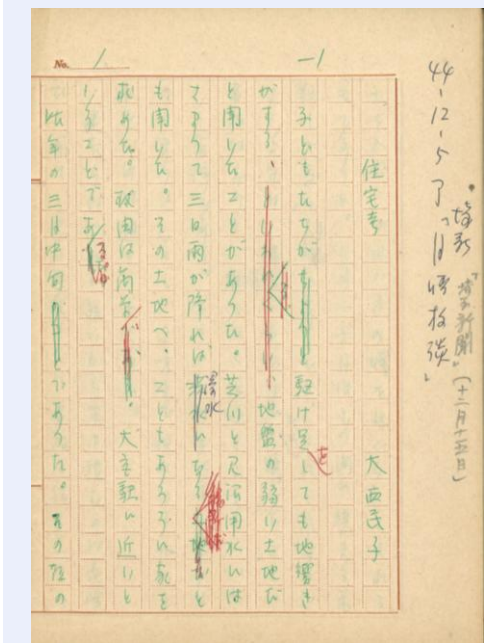
終戦後の1947(昭和22)年、姉の民子が  
おおにしひろし  
 大西博と結婚、夫婦は大宮市(現・さいたま市大宮区)に移住しました。そんな民子を頼ってか、1945年に病で父を亡くしていた佐代子も母とともに埼玉へ移住します。かつて大宮公園内にあった埼玉県立文化会館で働いていた民子の同僚に、岩槻市(現・さいいわつきたま市岩槻区)にある浄国寺じょうこくじの関係者がいたことがきっかけで、佐代子たちは浄国寺の部屋を貸してもらえることになりました。そして、佐代子は、1953(昭和28)年、21歳で埼玉大学の文理学部文学科に入学、在学中は海外文学に惹かれ、卒業論文ではエミリ・ブロンテの『嵐が丘』を取り上げました。



▲写真「母・カネ(左)と佐代子(右)」  
 撮影年度不明

やがて、浄国寺での暮らしに夫と別居状態になっていた民子も合流、姉・母とともに3人での暮らしが始まりました。1960(昭和35)年には母が亡くなり、姉妹は岩槻を出て大宮へと移住。そして1968(昭和43)年に大宮市ほりのうちちよう堀の内町(現・さいたま市大宮区堀の内町)の住宅を購入します。

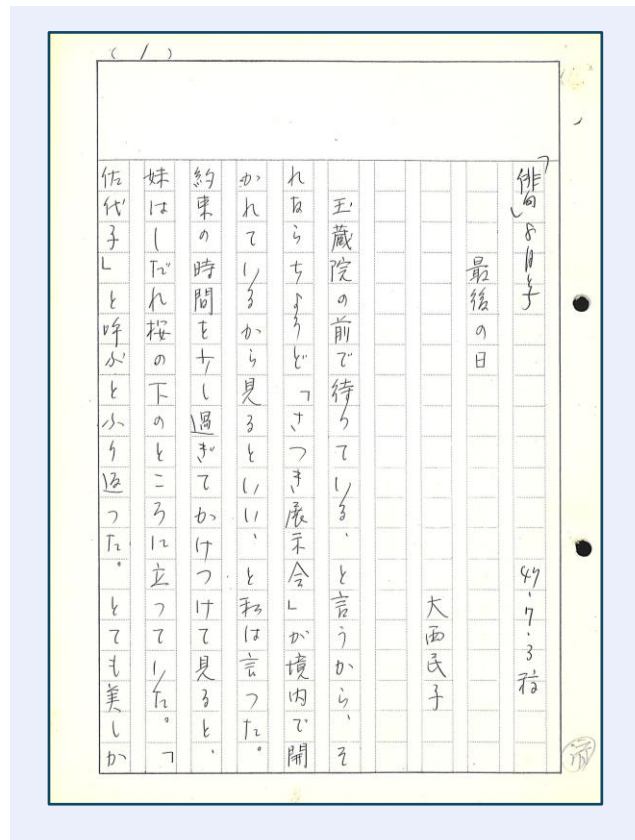
図書館での勤務と歌人としての活動で忙しい姉のため、佐代子は家事を担っていました。また、姉の作った短歌を最初に批評するのも佐代子でした。感性が鋭く、歌の好き嫌いをはっきり言う佐代子は、「私の一番怖い批評家でもあった」と民子は語っています。



▲自筆原稿「住宅考」(No.8)

ある日、民子と佐代子は大宮市の堀の内町の住宅広告を見つけます。当初は見学だけのつもりでしたが、熱い勧誘に押されその場で契約を決めてしまいました。

その一方で、自分の文章をほとんど遺していない佐代子ですが、「わが家のシレーヌー大西民子の素顔一」と題して、妹から見た歌人の姉・民子についてのエッセイを執筆しています。この作品は、雑誌「短歌」1972(昭和47)年4月号に掲載されました。1972(昭和47)年6月4日、エッセイの原稿料を得た佐代子は、お昼に姉を外食に誘い、お店での食事を楽しみました。そして、その晚いつものように眠りにつきましたが、佐代子は突然の心臓麻痺しんぞうまひにより死去しました。享年40歳。妹との突然の別れに大きなショックを受けた民子は、1975(昭和50)年、佐代子への追悼の歌を中心とした歌集『雲の地図』を刊行しました。

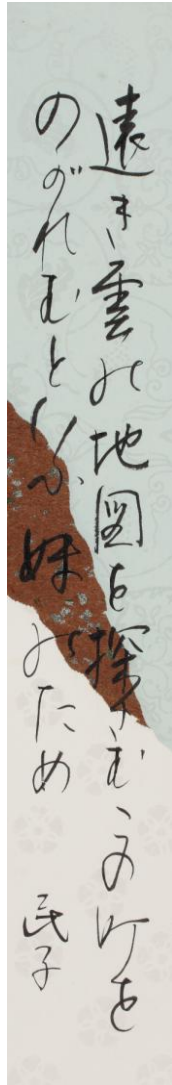


▲自筆原稿「最後の日」(No.1)

佐代子が亡くなった日の出来事について、民子が書いたエッセイです。幼いころから佐代子は身体が弱く、亡くなったその日は浦和で一緒に昼食をとり、妹も嬉しそうにしていたことについて触れています。

民子が歌人として有名になるにつれ、大宮の自宅を訪ねる人も多くなっていきました。姉とゆっくり過ごしたい佐代子は、来客の多さに辟易していたようです。「おひとのこないところへ引っ越ししましょうよ」と言われた民子は、佐代子のため遠い雲の地図を探そうと詠んでいます。

▶自筆短冊「遠き雲の地図を探そうと妹のため」(No.12)



## 佐代子のエッセイ

### 「わが家のシレーヌ」

「わが家のシレーヌ—大西民子の素顔—」は、妹から見た歌人の姉・民子についてのエッセイです。

内容は、姉妹の幼いころの思い出、大宮の堀の内町での暮らしの様子、困っている人を放っておけない姉の性格など、姉妹の暮らしがユーモラスに描かれているのが特徴です。

この、雑誌「短歌」1972(昭和47)年4月号に掲載された4ページに渡るエッセイを、今回は大きく3つに分けてご紹介いたします。

### 「シレーヌ」とは？

「シレーヌ」=「Sirene」とは、フランス語でギリシャ神話に出てくる「セイレーン」=「人魚」を意味しています。また、その逸話から人を惑わす女性という意味や、サイレン(警笛)意味を含んでいます。また、雑音という意味もあると言われた民子は、それを肯定していたようでした。佐代子は果たしてどのような意図でこの題名をつけたのでしょうか。

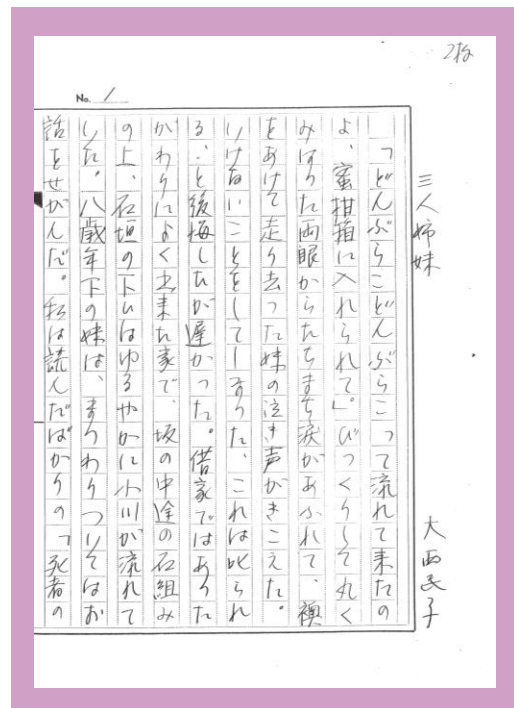
## 幼いころの思い出

佐代子が小さいころ、姉の民子から捨て子だと嘘をつかれて泣いてしまったことや、民子の帰省時のエピソードが紹介されています。

民子は、盛岡高等女学校卒業後に奈良女子高等師範学校に入学して学校寮に入ったため、佐代子は長い間姉と離れ離れに暮らしていました。

姉の帰省を待ちわびる佐代子は、民子が好きだった谷崎潤一郎に自分も感化されたり、「あんな病人みみたいな写真」と母が酷評する、姉がいつも持ち歩いているブロマイドについて

「この人、だれ？」と聞いたところ、おごそかに「ショパン」と説明されたことなどを書いています。



#### ▲自筆原稿「三人姉妹」(No.5)

民子が、佐代子に捨て子だと嘘をついた時の思い出を書いたエッセイです。同じエピソードについて、「わが家のシレーヌ」で佐代子も触れています。



▲写真「佐代子(左)と民子(右)」  
撮影年度不明

## 堀の内での暮らし

母亡き後も浄国寺で暮らしていた佐代子と民子でしたが、しばらく民子が働く埼玉県立文化会館の公舎に住んだ後、大宮市堀の内町の住宅を買うことにしました。

佐代子は日々の暮らしについても触れています。ある日のこと、思い悩む民子を心配して佐代子が姉の部屋を覗くと、民子は気分転換にひとりファッション・ショーを楽しんでいました。

また、民子は占いに凝っていて他人の運勢を見てあげることもありました。佐代子は半信半疑に思いつつも、姉の言うことには妙な信ぴょう性があると書いています。

## 面倒見のいい姉

佐代子は、民子は困っている人がいると放っておけない性格であると言っています。時には自分が疲れ切ってしまうほど親身に相談に乗ってあげることもあり、佐代子は断ることのできない姉を「イエスさん」と呼んでいました。

また仕事柄、多くの献本が送られてきており、民子の捨てきれない性格から、大量の本があふれていました。佐代子は、防衛手段を講じないと、まもなく家中本だらけにされてしまうだろうと憂えています。

民子には浪費癖もあり買い物に行けばあちこちの売り場に興味を持って立ち止まってしまうため、佐代子は絶えず牽制しながら歩かなければなりませんでした。

そして、急ぎの仕事があるのに洋裁をはじめようとしている民子を見て、「何の<sup>くったく</sup>屈託もなさそうな姉である」と呆れつつもどこか温かい言葉を寄せて文章を終えています。

### 大西民子 (1924-1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で追空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2026年5月2日  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1  
電話 048-643-3701  
FAX 048-648-8460